

岩国美学を考える

杉山京子

専業主婦に甘んじていた私は子育てに一区切りついた平成九年、ボランティアガイドに迷わず入会した。そして平成十七年、二井知事を塾長とする観光交流塾で「地旅」を学び、ガイドの経験を下敷きに「岩国地旅の会」を立ち上げた。デイストネーションキャンプの受け入れ態勢を作っておく大目的があった。

主婦がボツと出て、身のほどを知らずに始めた事業だったが、無知が強みだったのだらうと回想している。たくさんの方々の巻き込み、また助けていただいた。

福田市長は市議会で観光の方向性について、「地旅」を例に取り上げてくださった。ガラス窓を塞いでいた幕をとったように、地域に浸透している絵が見え、活動の評価を戴いたような感動で小さな体が震えた。町のリーダーの捉え方で市民の活動が生き延びることを実感した。感謝に堪えないことであった。

観光地の宿命は常に観光客の動向に左右されるという概念があった。十年を経た今は、観光の成熟化が進み、モーターゼーションの発達で、観光客はよりパーソナルな方向へ向いている。目先の流行に一喜一憂する観光競争は終わるであろうと思われる。

求められることは、その町の秀逸なストーリー性の魅力である。

市民が誇りに想い、守るべきものがあれば、そのことが風土となり、その町の品格をつくる。岩国市は普遍性の要素をもつ抜きん出た町である。

観光地に地旅を定着させることは町の活性化には必要かつ革新的なことであったと自負している。

そして、若い人のために観光アカデミーを開講した。初日、山本時博氏に基調講演の講師をお願いした時のこと。

山本氏は「岩国市の底流にあるもの、根幹は吉川文化です」と言い切られた。日刊いわくには、一面に大きく『吉川文化』と見出しを付けてくださった。

駿河の国を発祥とし、常に日本の歴史のエポックメーカーであり、そのことを喧伝することもなく理念がぶれることなく、今の繁栄をもたらされたことを市民は誇りとすべきであり、アイデンティティとすべきだと。

そしてその理念は「他のために尽くす慮りの精神」と言われた。私は城下町という言葉で岩国市の接頭語のように使っていた。その深い意味までは及ばないでいたことを反省し、古文書を紐解くと同時に、明治後期に塩井氏が発行

された興風時報を繰ってみた。あらためて岩国市は吉川家から数々の恩恵を蒙っていることに驚かされる。初めに教育ありきという教えは、お家のみに留まらず、岩国市民のために私財を投じて学校・図書館・奨学金制度・学生寮の建設・公園を作る等々、枚挙にいとまがない。元大名家が一市民となられてなお、慮りの精神は一貫されている。



山本時博氏に基調講演の講師をお願いした時のこと。

さらに我々が記憶に刻んでおくべき、特筆すべきことがある。時代を遡り、吉川広家公が関ヶ原の後、岩国市に移封され、岩国初代藩主として築城と町割りを企画、海を干拓し、今日の繁栄の元を作られたことは周知のことと思う。その詳細の一つを紹介する。

山口県には、宇部市鞆府、田布施町麻里府、そして岩国市麻里布

り、旧国道2号線の八丁土手の工事中、平家岳から風化した花崗岩の砂が本谷、西念寺谷、薬師谷から流れ落ちては山のように積り工事を中断させた。砂山という地名はその時つけられた。

そこで一計を案じ、八丁土手の上に雨水を流す川を作り、その下に山水を海へ逃がす川をもぐらせたいわゆる「二段川を作ったのだ。現在、国道沿いの丸亀製麺や日産の裏にある土手と天井川と旧道はその時に造られた工事の名残である。そして桜地蔵院前に流れる川、一の滝から流れる川や薬師谷から流れる川は、国道の下に土管を埋めてあるが、その当時のままの形状である。

この大事業の成功は幕府に聞こえ、利根川水系の最激流地である石垣工事をお手伝い普請と称して毛利家が引き受け、吉川家が完成させている。その工事中に埼玉県熊谷市の国宝・貴総門の設計を長谷川重衛門が引き受けたという歴史に残るエピソードも生まれた。

室の木開拓の成功は現在の岩国市の原点である。麻里布中学校附近の住民の皆さんは排水処理でお困りのため、中学校のグラウンドを貯留池にする計画がなされるが、工事中にこの遺跡が撤去されることなく、叡智を以て顕彰する形として残してほしいと切に願っている。

川下の開作は、その後もたゆまず進められ、工業地帯が作られ、八丁田は蓮の生産はもろろのこ

と、渡り鳥の休息地の宝庫として全国愛鳥家にその名を馳せている。今も牛野谷の西端から錦川の水を八丁田に送り続けている。今年NHK大河ドラマ『花燃ゆ』で秋市・防府市は高張りのテシヨンの感がある。三年前にNHKディレクターを岩国へお招きし、岩国十二代藩主経幹公の活躍を取り入れていただくよう奔走した。

その時にお集まりいただいた吉川会の皆様のご提案で、吉川文化再発見委員会を発足することになった。昨春秋、吉川家三十二代ご当主の重幹様を迎えてオープンフォーラムを開催したが、立ち見が出るほどの大盛況であった。

今年十一月八日(土)午後一時から第二回オープンフォーラムを開催、岩国市内の小中高校生の代表とお殿様対談が実現する。この企画はずっと続いていく予定である。

江戸時代に宗家との確執もありながら肅々と岩国を統治された吉川家。

維新後百五十年を経た今も、「お殿様」と市民に敬愛される元大名家が全国にどれほどあるだろうか。

岩国市民の生活の中には見えない教えが浸潤し、風土となり誇るべきことが永遠につながっている。城下町の薫り、それが吉川文化であり、岩国美学となる。(岩国地旅会会長 岩国観光コンシェルジュ)